

アスベスト天井

87.6/17 毎日
川越の教職
職員住宅

16年放置 健康障害の恐れ

埼玉県川越市が所有する教職員住宅の天井に、発がん性があり肺障害の原因物質として問題化している石綿（アスベスト）が十六年間にわたり使われていたことが十六日までにわかった。すでにアスベストは撤去されたが、アスベストは吸い込んでから二十〜四十年後に発がんするといわ

れるため、居住者は「川越教職員住宅アスベスト被害を考える会」（内田秀人事務局代表）を結成、近く同市と同市教委に対し、健康診断の実施などを求める要望書を出す。教職員住宅（同市藤原町二七の二）は同市の四十五年度

の事業で、四十六年三月に完成。鉄筋コンクリート造り三階建てで、延べ床面積は三〇六平方メートル。賃貸住宅で、二階は養育用がそれぞれ三室

お申し込みは 03-664736
六室。これまで延べ四十七人が入居した。

アスベストが吹きつけてあったのは一、二階の各室の台所、六畳間、四畳半、押し入れの天井部分。テレビなどでアスベストの危険を知った居住者が労働省産業医学総合研究所に分析を依頼したところ、発がん性物質のアモサイトとクリソタイルが含まれていることがわかった。

教委は五月一日に撤去作業を終えたあと、室内のアスベスト濃度を測定した結果、労働現場の基準値（ニファイバ一〇〇中に長さ五ミクロン以上のものが二本）は下回ったものの、住環境としては濃度の一・二四を測定した。「考える会」はこの測定が二部屋だけしか行われず、無人状態の測定のため、全室で無人と生活状態の二通りの測定を教委に申し入れている。

同市では今後、考える会の申し入れを受け濃度測定を実施するとともに、市内の公共施設の総点検を行うが、「静かな時限爆弾（アスベスト災害）」の著書で知られる広瀬弘忠東京女子大教授は、「子どもが駆けたりするとアスベスト濃度が高くなるので、アスベスト住宅に永年住んでいたとなると相当危険」と、危険（？）としている。